随想
Essay

# 特集「EDDI(Energy Efficiency Design Index)/EEOI(Energy Efficiency Operational Indicator)への取り組み」にあたって*

長谷川　和　彦**

本誌ではそのつど，タイムリーな特集が組まれており，門外漢には大変要領よく勉強できる，そして，専門家にとってはすでに知られていることながら，さらに新しい発見や次の方向を見て取ることができる良い機会となっている．と，これまで人ごとのように見ていた．ところが，学会員を長年やっていると，編集委員なる役目が回ってきて，次号を担当せよ，と突如としてその特集号の一つを自分が担当することになった．

著者はもともと，学会で言うと日本船舶海洋工学会に主軸を置き，さらに，船舶の操縦性や制御，安全性といった分野に進むにつれて，日本航海学会，そして，石谷清幹先生や石田憲治先生（ともに故人）に誘われ，機器の自動化などに関連して本学会にも参加させていただくことになった経緯がある．しかし，舶用機関には門外漢であり，これまでに学会に参加したことはない．そんな一会員に大役が回ってきたのである．本学会の懐の広いところであり，大胆なところである．いったいどのような特集を組めば良いのか，当然のことながらこれまでの特集や他学会の特集をにわか勉強することになった．ここで，あることに気づいた．常に学会に参加している役員レベルの方，そして，論文を投稿して学会に参加している方，各種の委員会に参加して日頃からその分野の動向に関心を持ち，シンポジウムなどを通じてそれぞれの研究や開発に熟知している方にとって学会誌は一種のおさらいの場である．しかし，それ以外の（たぶん）多くの私のような会員にとっては学会誌が唯一の学会との接点である．

これは，なおさら，責任重大である．経緯はともかく，特集として「EDDI(Energy Efficiency Design Index)/EEOI(Energy Efficiency Operational Indicator)への取り組み」を取り上げることにした．このテーマを選んだ大きな要因はもちろん，地球温暖化，排出ガス規制に関するIMO（国際海事機関）の新しい規制である．間接的な要因は，日本船舶海洋工学会誌「KANRIN」が2号[注]にわたって，同様の特集を組んだことにある．しかし，その二番煎じにはしたくなかった．本学会のメインテーマはもちろん舶用機関である．したがって，本特集では，「KANRIN」が取り上げなかった，あるいは，取り上げきらなかった舶用機関から見たEDDI，EEOIを基本のコンセプトとすることにした．

さて，次なる問題は，どなたに原稿を依頼するかである．すでにおわかりのように著者には本学会にほとんど人脈がない．特集の成否は半分以上，執筆者の人選によると私は常日頃思っている．これは大変だ．そこで，本学会に多くの人脈をお持ちで，先の「KANRIN」に舶用機関の立場から原稿を書かれた九州大学の高崎講二先生に突撃でゲストエディタ的役割をお願いしたところ，快く引き受けていただき，ご覧のように豪華な執筆陣を迎えることとなった．あとで，高崎先生が本学会の第25代会長であることを知り，すばらしい人選をしていただいたことに深く感謝申しつつ，恐縮した次第である．

ゲストエディタという考え方は現在の編集委員会にはないが，それを受け入れていただいたのは高崎先生のおかげか，編集委員会の新入り編集委員への思いやりかはわからないが，編集委員会や事務局の地道ながら精力的活動と支援がなくては期限内にやりきれなかったであろう．

これまでは，最低限の学会への寄与として会員として継続してきたが，始めて学会への学術的寄与ができたことを素直にたいへんうれしく思うとともに，それを支えていただいた各位にここで，改めて感謝申し上げたい．

最後に，本特集号への執筆をご快諾いただき，年末の忙しい時期に原稿をお寄せいただいた執筆者各位には校閲などで何度も事務局との連絡を取っていただいたこと，原稿中使用された写真の一部を表紙デザインとして使用するという厚かましいお願いにもご快諾いただいたことを深く感謝申し上げます．

*原稿受付　平成27年1月30日．
**正会員　大阪大学大学院（吹田市山田丘2-1）．

注 EDDI特集(その1)，KANRIN，第53号，(2014-3)
EDDI特集(その2)，KANRIN，第56号，(2014-9)